

# The Influence of Romantic Love on Identity Development of University Students

Kaori KITAHARA, Kōbō MATSUSHIMA  
and Hideaki TAKAGI

横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学) No.10 別刷

Reprinted from  
THE EDUCATIONAL SCIENCES  
Journal of the Faculty of Education and Human Sciences  
Yokohama National University  
No.10, FEBRUARY, 2008

# 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響

北原香緒里\*・松島 公望\*\*・高木 秀明\*\*

The Influence of Romantic Love on Identity Development of University Students

Kaori KITAHARA, Kōbō MATSUSHIMA & Hideaki TAKAGI

## 問題と目的

### 1. 問題

『恋愛』は、いつの時代でも常に絶えることのない問題の一つである。世間では、映画、TV、雑誌などあらゆるところで恋愛というテーマがあげられており、人々の高い関心がよせられている。アレクサンドリクスは、以下のように述べている。「恋は、できの悪い学者よりも数倍勝る人生の教師である。」また、Frankl (1952) は、「人間は、その本来的な生き方、成長の方向に向かって生活していないと、自分の本当にしたいことがみつからない、本当にこんなことでよいのだろうかといったある種の欲求不満を感じる。」と述べている。このことから、人は常に成長を求めて生きているといえる。恋愛も例外ではなく、成長の方向に向かった恋愛でないと、不安になったり、不満を感じたりするものである。

成長について、Erikson (1959) は人生のそれぞれの段階によって、獲得すべき発達課題があるとしている。特に青年期は、アイデンティティを確立しつつある期間であるとし、心理的危機を乗り越えてアイデンティティを獲得することが、青年期の主な課題であるとしている。しかし、「青年期は長期化している。」(大野, 1995) と指摘されているように、結婚年齢や出産年齢の上昇、大学への進学などによって、就職や結婚など人生の選択に関する悩みに直面する機会が先延ばしにされており、その結果、アイデンティティを獲得する期間も延長されている。Eriksonが区分した年齢段階によると、大学生の時期は、青年期の次の段階である若い成人期にあたり、社会的課題は親密性の獲得である。しかし、青年期が長期化していることから、大学生は、未だにアイデンティティ獲得の時期であるにもかかわらず、さらに親密性を得るための営みまでしなくてはならないということになる。

大野(1993)は、「アイデンティティは恋愛によって確立できるものではない。アイデンティティを統合している途中段階での恋愛は、自己のアイデンティティを恋人からの評価によって補強しようとする営みに終始するものであって、真の親密性を得るものではない。よって、だいたい長続きしない。」という「アイデンティティのための恋愛」を提唱している。しかし、前述したように、人は恋愛から多くのことを学ぶ。それは、恋愛が単なる感情の問題でなく、他者との強いつながりを通じた、全生活の問題として捉えられるからである。西平(1981)は、恋愛の全人生への関わりを統合しようとする愛の全体的問題化を提唱しており、決して恋愛をアイデンティティを補うための道具

---

\* 横浜市立港北小学校

\*\* 横浜国立大学

としていない。むしろ、恋愛の定義を「自己のアイデンティティを確立しようとする心の営みだ。」とすらしている。以上のことを踏まえると、大学生の時期は、獲得すべき発達課題がアイデンティティと親密性の両方を混在しており、異性と親密な関係を持つ恋愛によって成長し、その過程を通じてアイデンティティを獲得していくと考えることができる。

しかし、過去の研究を見ても、直接的に恋愛とアイデンティティの確立の関係を検討している研究は見当たらない。また、恋愛は青年期の身近な問題であるにもかかわらず、その実態を調査し、検討するといった研究もあまり多くはみられない。恋愛とアイデンティティの関係を、数量的に研究するだけでなく、具体的な恋愛の質的な側面まで探ることは、青年期をより理解する上で意味のあることだと思われる。また、恋愛がアイデンティティの確立に及ぼす影響を検証することで、アイデンティティの拡散が起きる青年期の、そこから抜け出すためのヒントを、身近な問題である恋愛から与えられるのではないかと考える。そこで今回は、恋愛はアイデンティティに影響を及ぼしているのか、及ぼしている場合、具体的にどのような恋愛によってアイデンティティを確立していくのか、大学生の恋愛を中心に探っていきたい。

## 2. アイデンティティについて

「アイデンティティ（自我同一性）」とは、E.H.Eriksonの発達理論の中心概念である。Erikson(1959)は、人生周期（life cycle）に沿った自我の発達を、S.Freudの心理学的発達段階を改訂し、心理社会的発達段階として定式化した。Erikson(1959)の考え出した心理社会的発達段階には、その段階に特有な自我の存在様式があり、また心理社会的な発達の危機がある。個人は、その危機を乗り越えて基本的な力（人格的活力）を身につけ、より健全な自我発達を目指すとしており、Erikson(1959)はその過程を、自我と社会との関係を中心に心理社会的発達段階として理論化し、8段階に分けている。その中で、アイデンティティを獲得することは青年期の主な課題であるとしている。そのアイデンティティの感覚を、「内的な不変性（sameness）と連続性（continuity）を維持する各個人の能力（自我）が、他者に対する自己という意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信。」であると説明している。この定義は、「私はほかの誰とも違う自分自身であり、私はひとりしかいない。」という不変性の感覚と、「今までの私もずっと私であり、今の私も、そして、これからの私もずっと私であり続ける。」という連続性の感覚を持った主体的な自分が、社会の中で認められた地位、役割、職業、身分などの「～としての自分」という感覚と合致している安定感、安心感、自信を意味している。つまり、『自分はこの人間だ。』ということはある程度明確に言うことができ、そして、自分なりの考えを持ち、自分の行動、意見に責任がもてているということである。青年期においては、このアイデンティティを統合することが、以後の人生において、自分らしく生きていくうえで重要であるといえる。

## 3. 恋愛について

恋愛の暫定的定義を、西平（1981）は、「異性間における美的根本特色を持つ、全人的結合の欲求に根ざす全ての感情と行動をさす。そしてそれをとおして、自己のアイデンティティ（自分の存在証明）を確立しようとする心の営みだ。」としている。また、「青年期は、まだまだ愛が他人に向けられるよりも、自分自身に向けられており、いわゆるナルチズム（自己陶醉）が恋愛感情の中核をなしている。」とも述べている。また、恋と愛の違いについては、「恋は、『どうしてあの人を好き

なのか』という問いに対して、『頭もいいしカッコいいから』といった美的条件を答えられるのが特徴であるが、愛は、そういった美的条件についての答えはない。『その人だから』といった、他の人との比較を超えたものである。したがって、愛の本質は、『無条件性の上に立つ相手への配慮』である。」としている。そして、「愛はいっさいの条件をとりぞいて、『彼は彼だから、彼女は彼女だから』という人間そのものを対象とする無条件性である。」としている。これは、外見など美的な条件や個々の個人的特徴に魅力を感じているわけではないことを示している。

恋愛関係が、個人の内面に影響を与えることを示唆する研究として、Dietch (1978)、堀毛 (1994)、Ruvolo&Brennan (1997)などが挙げられるが、どれも恋愛経験の有無そのものに焦点をあてていたり、熱愛度や相手からの援助の違いによる相互作用について言及している。また、多川 (2002)は、関係の親密化という質的側面に着目し、対人関係観を取り上げ、これが恋愛や友人関係の親密化によって影響を受けるかどうかを検討している。結果としては、恋愛関係の親密化が、「協調性・誠実性」「主張性」に影響していることを示している。ここでは、恋愛関係の親密化という質的な指標を用いてはいるものの、具体的にどのような相互作用が対人関係観の変化を生じさせているのかははっきりと言及していない。具体的な相互作用を用いている研究の1つに、多川 (2003)があり、個人の内面にどのような相互作用が影響しているのかを、面接法を用いて探索的に検討している。ここでは、個人の内面に影響を与えている具体的な出来事を、面接を通してより詳しく検討している。恋愛の問題を、統計資料や態度測定などを使って研究するのも1つの方法だが、それだけでは、個々の部分や個人差といった内面的なものがみえづらい。もっと、恋愛における心理の成り立ちや、人生にとっての意味など、人格的な見方、現実在即した見方が必要である。しかし、恋愛に関係するそういった研究は数少ない。このことからうかがえるように、恋愛というテーマは、心理学的に追求することが難しい問題であるといえる。内容は一人一人異なるであろうし、同じ人であっても、その時その時によって考えていることが違っていたり、気持ちがころころ変わったりするからである。

#### 4. アイデンティティのための恋愛について

恋愛に関する研究が少ないなか、大野 (1993)は、“アイデンティティのための恋愛”という概念を提示している。「親密性が成熟していない状態で、かつ、アイデンティティの統合の過程で、自己のアイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする、または、補強しようとする恋愛的行動」であるとし、これはE.H.Eriksonの「青年期の恋愛は、その大部分が、自分の拡張した自画像を他人に投射することにより、それが反射され、徐々に明確化されるのを見て、自己の同一性を定義づけようとする努力である。」という考えから規定されたものである。

アイデンティティのための恋愛の特徴(大野, 1993)には、①相手からの賛美、賞賛を求めたい、②相手からの評価が気になる、③しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる、④相手の挙動に目が離せなくなる、⑤結果として、交際が長続きしないことが多い、という5つが挙げられている。

特徴の内容は以下の通りである。①、②については、自分のアイデンティティに自信がもてないため、相手からの賞賛を自分のアイデンティティを確かなものにするために使用する、つまり、相手の評価が自分のアイデンティティの拠り所になっているため、当然賞賛し続けてもらわないと自分の心理的基盤が危うくなることになる。そのため、自分への評価が非常に気になってしまうということである。③については、相手と会うたびに、「話すことがだんだんなくなっていく。」「自分がだんだんなくなっていくようだ。」というような不安を臨床心理学では「呑み込まれる不安」と呼ぶ

が、異性と心理的に親しくなるためには、変に気取る必要はなく、自分のままで付き合うことができるようになっていたほうがよく、それには、それぞれのアイデンティティの統合が必要である。それが不確かなまま他者とごく親しい関係になった場合、相手といると自分というものがどんどんなくなっていくような不安を感じるということである。同様に、④については、相手からの評価が非常に気になるため、相手の挙動がとても気になってしまい、その結果目が離せなくなるということである。⑤については、以上のような関係にある青年達の主な関心は自分自身であり、アイデンティティの課題を残している青年は、自分のことで頭がいっぱいで相手のことまで考える余裕がない。交際が続くと、アイデンティティの不確かさのためにのみ込まれる不安が高まり、この不安から逃れるためには相手からの賞賛を得つけなければならず、当然、このような関係は長続きしないということである。

大野（1993）によれば、アイデンティティのための恋愛は、長期的に継続して、本来の親密さに基づく関係に発展することは少なく、恋愛経験とは無関係の部分で、アイデンティティの統合とともに、自分に自信をもつことができるようになってはじめて、真の親密性の獲得にいたるのだと述べている。

## 5. 本研究の目的

以上のことを踏まえて、本研究では、まず研究1として、恋愛とアイデンティティの関係を質問紙調査によって検討することを目的とする。続いて、研究2では、どのような関係がアイデンティティに影響を与えているのか、面接調査によって探っていくことを目的とする。

### 研究1～質問紙調査～

#### 1. 目的

恋愛とアイデンティティの関係について検討することを目的とする。なお、アイデンティティについては、アイデンティティ尺度（下山，1992）の、「アイデンティティの基礎」と「アイデンティティの確立」、および、EPSI尺度（中西・佐方，2002）の「同一性感覚」の得点を用いて測定する。

#### 2. 仮説

1. 目的を踏まえて、以下の仮説を設定し検討する。

<仮説1>恋人がいる者のほうが、恋人がいない者より、アイデンティティの基礎、確立、同一性感覚の得点が高い。

<仮説2>恋愛経験が豊富な（交際人数が多い）人ほど、アイデンティティの基礎、確立、同一性感覚の得点が高い。

<仮説3>長期交際経験者のほうが、経験していない者より、アイデンティティの基礎、確立、同一性感覚の得点が高い。

### 3. 方法

#### (1) 調査対象者

調査対象者は、横浜国立大学の学生1年～4年の計70名。性別の内訳は男性31名、女性39名である。

#### (2) 調査時期

2006年12月11日～12月22日

#### (3) 調査方法

回答形式は個別自記入形式で実施し、個別配布個別回収形式で実施した。回答は無記名で行われた。実施時間は、10分程度であった。

#### (4) 質問紙の構成

##### ① フェイスシート

被験者の基本属性（性別、学年、年齢）の記入を求めた。

##### ② 異性との交際状況をたずねた。現在恋人がいるかどうか、現在恋人がいると答えた場合、交際期間はどのくらいか、今までの恋愛経験と、その交際期間はどのくらいかを尋ねた。

##### ③ アイデンティティ尺度（下山，1992）

日本の大学生の「モラトリアム心理」と、アイデンティティの確立との関連を検討するために、下山（1992）が開発したものであり、「アイデンティティ基礎」尺度と、「アイデンティティの確立」尺度の2つで構成されている。「アイデンティティの基礎」尺度は、アイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず、不安や孤独におそわれる気持ちを反映した内容になっている（すべて逆転項目で構成されている）。「アイデンティティの確立」尺度は、自己の主体性や自己への信頼が形成されていることを表す項目となっている。尺度項目は、Table 1、Table 2に示す。

Table 1 「アイデンティティの基礎」尺度

- 
- |    |                                     |
|----|-------------------------------------|
| 1  | 私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている。           |
| 2  | 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。                 |
| 3  | 異性とのつきあい方がわからない。                    |
| 4  | 私は、人がみているとうまくやれない。                  |
| 5  | 私は、どうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じ込めてしまう。 |
| 6  | 自分一人で初めてのことをするのは不安だ。                |
| 7  | まわりの動きについていけず、自分だけ取り残されたと感じることがある。  |
| 8  | 私は、人と活発に遊べない。                       |
| 9  | 自分の中には、常に漠然とした不安がある。                |
| 10 | 何かしているより空想にふけていることが多い。              |
-

Table 2 「アイデンティティの確立」尺度

- 
- 1 私は、興味を持ったことはどんどん実行に移していく方である。
  - 2 私は、十分に自分のことを信頼している。
  - 3 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる。
  - 4 自分は、何かを作り上げることのできる人間だと思う。
  - 5 自分にまとまりが出てきた。
  - 6 社会の中での自分の生きがいが増えてきた。
  - 7 私は、自分の個性をととても大切にしている。
  - 8 私は、魅力的な人間に成長しつつある。
  - 9 私は、自分なりの価値観を持っている。
  - 10 自分の生き方は、自分で納得のいくものである。
- 

④ EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) (中西・佐方, 2002)

EPSIは、8つの下位尺度とその総得点によって構成されている。8つの下位尺度は、それぞれ以下のような意味を持っている。

信頼性 (Trust) は、他者を含めた周りの世界に対する信頼感、および自己への信頼感 (自信) である。この得点が低い場合、自己や他者、あるいは周りの世界を不信感を持って体験していることになる。自律性 (autonomy) は、自らが自由に選択し決断できるという有能感を持ち、自分に対して疑惑や恥を感じていないことである。自主性 (initiative) は、自発的かつ意欲的にものごとに取り組み、自分がよいと思う行動に責任を持つと心構えである。勤勉性 (industry) は、目標を実現するために自分の技能を発揮することによる、自尊感情を伴った効力感である。同一性 (identity) は、自分という存在を明確に理解し、人生をどう生きたいかをしっかりつかんでいる感覚である。同一性得点が高いものは、「同一性対同一性混乱」という心理社会的危機をうまく解決できており、明確な自己概念を確立しているといえる。親密性 (intimacy) は、自分を見失うことなく他者と親密な付き合いができ、孤独感を感じないでいることができる状態である。生殖性 (generativity) は、次の世代を世話し育成することに対する関心と、そのことへのエネルギーを注いでいるという自信である。統合性 (integrity) は、自分の人生を自らの責任として受け入れていくことができ、死に対して安定した態度をもっていることである。

全体を同一性の測定尺度と考えて、総得点による同一性の達成度の評価も可能であり、各下位尺度をそれぞれの心理社会的発達課題の達成度を示すものとして個別的にとらえることもできる。回答は5段階の自己評定で求め、「全くあてはまらない」を0点とし、「とてもよくあてはまる」まで順次1点ずつウエイトを増やしていった。尺度項目は、Table 3に示す。

Table 3 EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査)

信頼性	同一性
<p>*私に、もっと自分をコントロールする力があればよいと思う。</p> <p>*私は、良いことは決して長続きしないと思う。 私は、世間の人たちを信頼している。 周りの人々は、私のことをよく理解してくれている。</p> <p>*私には、何事も最悪な事態になるような気がしてくる。 世の中は、いつも自分にとってよい方向に向かっている。</p> <p>*周りの人たちは、私を理解してくれない。</p>	<p>私は、自分が何になりたいのかをはっきりと考えている。</p> <p>*私は、自分が混乱しているように感じている。 私は、自分がどんな人間であるのかをよく知っている。</p> <p>*私は、自分の人生をどのように生きたいかを自分で決められない。</p> <p>*私は、自分のしていることを本当は分かっていない。 私は、自分が好きだし、自分に誇りを持っている。</p> <p>*私には、充実感がない。</p>
自律性	親密性
<p>*私は、何事にも優柔不断である。</p> <p>*私は、決断する力が弱い。</p> <p>*私は、自分という存在を恥ずかしく思っている。 私は、自分で選んだり決めたりするのが好きである。</p> <p>*私は、自分の判断に自信がない。</p> <p>*私は、この世の中でうまくやっつこうなどとは決して思わない。 私は、物事をありのままに受け入れることができる。</p>	<p>*誰かに個人的な話をされると、私は当惑してしまう。 私は、特定の人と深い付き合いができる。</p> <p>私は、あたたかく親切な人間である。</p> <p>*私は、もともと一人ぼっちである。 私は、他の人たちと親密な関係を持っている。</p> <p>*私は、他の人よりも目立つのを好まない。 *私は、他の人たちとなかなか親しくなれない。</p>
自主性	生殖性
<p>*私には、みんなが持っている能力が欠けているようである。</p> <p>*私は誰か他の人がアイデアをだしてくれる事をあてにしている。 私は、多くのことをこなせる精力的な人間である。</p> <p>*たとえ本当の事であっても私は否定してしまうかもしれない。</p> <p>*私は、リーダーというよりも、むしろ後に従っていくほうの人間である。</p> <p>*私は、いろんなことに対して罪悪感を持っている。 私は、してはいけないことに対して、自分でコントロールできる。</p>	<p>私は、後輩や部下のめんどうをよく見る。 私は、将来に残すことのできる業績をあげつつある。</p> <p>私は、よい親になる自信がある。</p> <p>*私は、後輩や部下を指導するのが苦手である。</p> <p>*私は、自分を甘やかすところがある。</p> <p>*私は、親になることが不安である。 私は、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う。</p>
勤勉性	統合性
<p>私は、いっしょうけんめいに仕事や勉強をする。</p> <p>私は、自分が役に立つ人間であると思う。</p> <p>私は、目的を達成しようががんばっている。</p> <p>私は、自分の仕事をうまくこなすことができる。</p> <p>*私は、物事を完成させるのが苦手である。</p> <p>*私は、のらりくらりしながら多くの時間を無駄にしている。</p> <p>*私は、頭を使ったり技術のいる事柄はあまり得意ではない。</p>	<p>*私は、自分が死ぬことを考えると不安である 私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う。</p> <p>*私は、生きがいをなくしてしまっている。 私は、悔いのない人生を歩んでいる。</p> <p>私は、自分の死というものを受け入れることができる。</p> <p>*私には、もっと別の生き方があるのではないかと思う。 *私の人生は、失敗の連続のように思う。</p>

\*：逆転項目

## 4. 結果

## (1) 恋人のありなし

男性と女性それぞれにおいて、恋人のありなしによる  $t$  検定を行った (Table 4参照)。その結果、男性の場合、恋人のありなしでは、アイデンティティの基礎、確立、同一性感覚のレベルのどれにおいても平均値に有意な差はみられなかった。一方、女性の場合、アイデンティティの確立 [ $t(37)=2.482$ ,  $p<0.05$ ]、自主性 [ $t(37)=2.062$ ,  $p<0.05$ ]、勤勉性 [ $t(37)=2.425$ ,  $p<0.05$ ] に有意な差がみられ、信頼性 [ $t(36)=1.939$ ,  $p<0.1$ ]、総得点 [ $t(36)=1.861$ ,  $p<0.1$ ] に有意傾向がみられた。

以上の結果から、男性は、恋人がいるかないかによってアイデンティティの程度に差はみられないが、女性の場合、恋人がいるかないかによって、アイデンティティの程度に差がみられることが示唆された。

Table 4 恋人の有無による各尺度得点の人数 ( $N$ )、平均値、標準偏差、および平均値の差の検定 ( $t$ 検定) 結果

	性別	恋人あり			恋人なし			$t$ 値
		N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	
基礎	男性	12	25.8	5.0	19	24.7	6.4	0.463
	女性	22	24.8	5.1	17	24.2	5.3	0.320
確立	男性	11	30.3	2.5	19	28.0	5.6	1.262
	女性	22	30.0	4.9	17	26.1	4.9	2.482*
信頼性	男性	10	20.0	3.1	18	20.5	4.2	-0.330
	女性	22	24.7	3.8	16	21.9	5.1	1.939+
自律性	男性	12	21.4	2.7	19	22.2	5.0	-0.470
	女性	22	23.0	4.7	17	22.2	4.2	0.602
自主性	男性	12	20.3	3.5	19	21.4	4.8	-0.735
	女性	22	22.1	4.3	17	19.4	4.0	2.062*
勤勉性	男性	12	21.9	4.6	19	23.7	4.0	-1.135
	女性	22	24.9	4.5	17	21.4	4.3	2.425*
同一性	男性	12	23.4	2.8	18	23.7	5.5	-0.146
	女性	22	25.5	5.4	17	23.6	4.7	1.122
親密性	男性	12	23.1	2.9	19	24.1	4.9	-0.616
	女性	22	25.6	3.8	17	24.7	3.6	0.773
生殖性	男性	12	21.8	3.8	19	21.9	3.7	-0.045
	女性	22	22.4	3.6	17	20.2	4.4	1.673
統合性	男性	12	22.7	4.4	18	22.6	3.5	0.038
	女性	22	25.1	4.9	17	23.3	5.1	1.113
総得点	男性	10	175.7	21.3	17	180.8	30.1	-0.471
	女性	22	193.3	27.6	16	176.4	27.9	1.861+

\*:  $p<0.05$  +:  $p<0.1$

## (2) 交際回数による差

男女別に、交際回数①0回、②1回、③2回～3回、④4回以上の1要因4水準による分散分析を行った (Table 5参照)。男性においては、自律性 [ $F(3, 27)=3.247, p<0.05$ ] に有意な差がみられた。Tukey法による多重比較を行った結果、①0回<②1回 ( $p<0.1$ )、および①0回<③2～3回 ( $p<0.1$ ) の有意傾向がみられたものの、①0回と④4回以上との間に有意差はみられなかった。このことから、1回も交際経験がないよりは交際経験があるほうが自律性は高いが、4回以上の交際経験によってさらに自律性が高まるとはいえないということが示された。

女性においては、アイデンティティの基礎 [ $F(3, 35)=3.195, p<0.05$ ]、アイデンティティの確立 [ $F(3, 35)=9.220, p<0.001$ ]、自律性 [ $F(3, 35)=3.632, p<0.05$ ]、勤勉性 [ $F(3, 35)=4.987, p<0.01$ ]、総得点 [ $F(3, 34)=3.834, p<0.05$ ] に有意な差がみられ、同一性 [ $F(3, 35)=2.510, p<0.1$ ] に有意傾向がみられた。Tukey法による多重比較を行った結果、アイデンティティの基礎においては、②交際回数1回<④交際回数4回以上 ( $p<0.05$ ) の有意差がみられた (以下、回数のみ記載)。アイデンティティの確立においては、①0回<④4回以上 ( $p<0.05$ )、②1回<③2回～3回 ( $p<0.01$ )、②1回<④4回以上 ( $p<0.001$ ) の有意差がみられた。自律性においては、②1回<④4回以上 ( $p<0.05$ ) の有意差がみられた。勤勉性においては、①0回<④4回以上 ( $p<0.05$ )、②1回<④4回以上 ( $p<0.05$ ) の有意差がみられ、②1回<③2回～3回 ( $p<0.1$ ) の有意傾向がみられた。同一性においては、②1回<④4回以上の有意傾向がみられた。総得点においては、②1回<④4回以上 ( $p<0.05$ ) の有意差、①0回<④4回以上 ( $p<0.1$ ) の有意傾向がみられた。これらの尺度においては、交際回数が増えるにしたがって平均値も高まる傾向があった。しかし、交際回数が1回の場合は平均値が有意に高くなるということではなかった。このことから、1回みの交際経験では、アイデンティティに正の影響はなく、2回以上の交際経験によって正の影響が与えられることが示唆された。女性の場合、数多くの交際経験を通して、物事をありのままに受け入れること、自分の決断で行動すること、目標に向かって努力すること、自分とはこういう人間だということを理解する、といった感覚が得られていくと考えられる。

Table 5 交際回数別による各尺度得点の人数(N)、平均値、標準偏差、分散分析結果

性別		① 0回	② 1回	③ 2回~3回	④ 4回以上	F値	多重比較	
基礎	男性	N	7	14	6	4	1.530	
		平均値	21.3	25.6	27.3	27.0		
		標準偏差	6.2	3.7	9.1	4.7		
	女性	N	10	7	10	12	3.195*	②<④*
		平均値	23.6	21.1	24.0	27.8		
		標準偏差	3.2	5.9	4.2	5.5		
確立	男性	N	7	14	6	4	0.935	
		平均値	26.7	29.9	30.0	27.3		
		標準偏差	7.1	4.3	3.8	1.0		
	女性	N	10	7	10	12	9.220***	①<④* ②<③** ②<④***
		平均値	26.5	22.3	30.1	31.8		
		標準偏差	4.2	4.5	2.6	4.8		
信頼性	男性	N	7	14	6	4	1.409	
		平均値	17.7	20.7	21.6	21.5		
		標準偏差	2.9	4.2	3.6	2.9		
	女性	N	10	7	10	12	1.572	
		平均値	23.3	20.4	24.1	24.9		
		標準偏差	5.1	6.6	1.7	4.1		
自律性	男性	N	7	14	6	4	3.247*	①<②+ ①<③+
		平均値	18.7	23.0	24.3	19.8		
		標準偏差	3.1	3.8	3.6	5.1		
	女性	N	10	7	10	12	3.632*	②<④*
		平均値	21.6	19.3	22.9	25.3		
		標準偏差	3.7	3.8	3.0	5.0		
自主性	男性	N	7	14	6	4	1.283	
		平均値	18.7	21.4	23.2	20.3		
		標準偏差	3.0	4.7	4.3	4.1		
	女性	N	10	7	10	12	2.007	
		平均値	19.1	19.0	22.6	22.2		
		標準偏差	3.4	6.7	3.0	3.8		
勤勉性	男性	N	7	14	6	4	1.277	
		平均値	20.4	24.2	23.2	23.0		
		標準偏差	3.9	5.1	2.3	2.2		
	女性	N	10	7	10	12	4.987**	①<④* ②<④* ②<③+
		平均値	21.2	19.7	24.8	26.1		
		標準偏差	4.5	3.3	3.7	4.4		
同一性	男性	N	7	14	6	4	1.123	
		平均値	21.0	23.6	25.7	24.3		
		標準偏差	3.2	5.6	2.9	2.9		
	女性	N	10	7	10	12	2.510+	②<④+
		平均値	22.8	21.9	25.5	27.3		
		標準偏差	4.5	6.5	3.2	5.2		
親密性	男性	N	7	14	6	4	1.369	
		平均値	21.1	24.0	25.7	24.0		
		標準偏差	2.1	5.2	3.9	1.6		
	女性	N	10	7	10	12	2.201	
		平均値	24.6	22.6	26.1	26.6		
		標準偏差	2.5	5.2	3.7	3.0		
生殖性	男性	N	7	14	6	4	1.735	
		平均値	20.0	22.4	24.0	20.3		
		標準偏差	4.0	3.4	2.6	4.4		
	女性	N	10	7	10	12	1.380	
		平均値	19.7	20.9	21.6	23.1		
		標準偏差	2.6	4.8	3.6	4.6		
統合性	男性	N	7	14	6	4	0.846	
		平均値	21.8	21.9	24.5	23.8		
		標準偏差	2.1	4.3	3.0	5.2		
	女性	N	10	7	10	12	1.956	
		平均値	22.3	22.0	25.9	26.0		
		標準偏差	4.4	6.7	2.0	5.5		
総得点	男性	N	7	14	6	4	2.048	
		平均値	155.4	183.5	192.4	176.8		
		標準偏差	17.6	28.5	21.7	25.5		
	女性	N	10	7	10	12	3.834*	①<④+ ②<④*
		平均値	173.7	165.7	193.5	201.4		
		標準偏差	18.7	38.5	14.5	28.7		

\*\*\*:  $p < 0.001$  \*\*:  $p < 0.01$  \*:  $p < 0.05$  +:  $p < 0.1$

### (3) 長期交際のありなし

2年以上の交際を長期交際と位置づけ、男女別に、①交際経験なし、②交際経験ありで長期交際なし、③交際経験ありで長期交際あり（以下、①経験なし、②経験あり長期なし、③経験あり長期あり、と記す）の1要因3水準による分散分析を行った（Table 6参照）。男性においては、アイデンティティの基礎 [ $F(2, 28)=2.572, p<0.1$ ]、信頼性 [ $F(2, 25)=2.629, p<0.1$ ]、自律性 [ $F(2, 28)=2.932, p<0.1$ ]、総得点 [ $F(2, 24)=3.204, p<0.1$ ]に有意傾向がみられた。Tukey法による多重比較を行った結果、有意傾向がみられたのは自律性（①経験なし<②経験あり長期なし）と総得点（①経験なし<③経験あり長期あり）のみであった（ $p<0.1$ ）。よって、男性において、長期交際はアイデンティティの獲得にさほど大きな影響を及ぼしていないと考えられる。

女性においては、アイデンティティの確立 [ $F(2, 36)=3.459, p<0.05$ ]、自主性 [ $F(2, 36)=6.244, p<0.01$ ]、勤勉性 [ $F(2, 36)=3.692, p<0.05$ ]、親密性 [ $F(2, 36)=4.408, p<0.05$ ]、生殖性 [ $F(2, 36)=5.048, p<0.05$ ]、総得点 [ $F(2, 35)=4.422, p<0.05$ ]それぞれにおいて有意差がみられた。Tukey法による多重比較を行った結果、アイデンティティの確立においては、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられた。自主性においては、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.01$ ）、②経験あり長期なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられた。勤勉性においては、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられた。親密性においては、②経験あり長期なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられ、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.1$ ）の有意傾向がみられた。生殖性においては、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）、②経験あり長期なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられた。総得点においては、①経験なし<③経験あり長期あり（ $p<0.05$ ）の有意差がみられ、②経験あり長期なし<③経験あり長期あり（ $p<0.1$ ）の有意傾向がみられた。

以上の結果から、女性においては、交際経験があり、なおかつ長期に交際しているほうが、アイデンティティの確立が高いということが示唆された。つまり、長期交際が女性に正の影響を及ぼしていると考えられる。

Table 6 交際経験および長期交際の有無による各尺度得点の人数(N)、  
平均値、標準偏差、分散分析結果

	性別	① ② ③			F値	多重比較
		経験なし	経験あり 長期なし	経験あり 長期あり		
基礎	男性	N	7	21	3	2.572+
		平均値	21.3	25.9	29.0	
		標準偏差	6.2	5.5	3.6	
	女性	N	9	18	12	1.292
		平均値	23.4	23.8	26.5	
		標準偏差	3.4	5.2	5.9	
確立	男性	N	7	21	3	1.058
		平均値	26.7	29.7	28.0	
		標準偏差	7.1	4.1	4.8	
	女性	N	9	18	12	3.459* ①<③*
		平均値	25.9	27.5	31.3	
		標準偏差	3.9	6.2	5.2	
信頼性	男性	N	7	21	3	2.629+
		平均値	17.7	20.7	23.0	
		標準偏差	2.9	3.9	1.7	
	女性	N	9	18	12	0.675
		平均値	23.3	22.8	24.8	
		標準偏差	5.5	4.9	3.4	
自律性	男性	N	7	21	3	2.932+ ①<②+
		平均値	18.7	22.7	23.7	
		標準偏差	3.1	4.4	1.2	
	女性	N	9	18	12	1.154
		平均値	20.9	22.8	23.8	
		標準偏差	3.2	5.2	3.8	
自主性	男性	N	7	21	3	1.581
		平均値	18.7	21.4	23.3	
		標準偏差	3.0	4.7	0.6	
	女性	N	9	18	12	6.244** ①<③** ②<③*
		平均値	18.6	20.0	24.1	
		標準偏差	3.1	4.0	4.1	
勤勉性	男性	N	7	21	3	2.030
		平均値	20.4	23.5	25.3	
		標準偏差	3.9	4.3	1.5	
	女性	N	9	18	12	3.692* ①<③*
		平均値	20.3	23.4	25.6	
		標準偏差	3.8	5.1	3.6	
同一性	男性	N	7	21	3	1.664
		平均値	21.0	23.9	26.3	
		標準偏差	3.2	4.8	2.1	
	女性	N	9	18	12	2.347
		平均値	22.2	24.4	26.9	
		標準偏差	4.4	5.4	4.6	
親密性	男性	N	7	21	3	1.801
		平均値	21.1	24.3	25.3	
		標準偏差	2.1	4.7	1.2	
	女性	N	9	18	12	4.408* ①<③+ ②<③*
		平均値	24.1	24.2	27.7	
		標準偏差	2.1	4.4	2.2	
生殖性	男性	N	7	21	3	1.543
		平均値	20.0	22.2	24.0	
		標準偏差	4.0	3.7	1.0	
	女性	N	9	18	12	5.048* ①<③* ②<③*
		平均値	19.6	20.6	24.2	
		標準偏差	2.7	3.6	4.3	
統合性	男性	N	7	21	3	1.357
		平均値	21.8	22.4	26.0	
		標準偏差	2.1	4.1	4.0	
	女性	N	9	18	12	2.160
		平均値	22.0	24.1	26.4	
		標準偏差	4.6	5.9	3.1	
総得点	男性	N	7	21	3	3.204+ ①<③+
		平均値	155.4	182.3	197.0	
		標準偏差	17.6	27.4	6.1	
	女性	N	9	18	12	4.422* ①<③* ②<③+
		平均値	169.4	182.2	203.4	
		標準偏差	14.5	32.3	21.2	

\*\*: $p<0.01$  \*: $p<0.05$  +: $p<0.1$

## 5. 考察

以上の結果から、男性と女性では、アイデンティティを獲得する要因が異なり、女性の場合は、アイデンティティを確立する要因に恋愛が大きく関係していると考えられる。これは、恋愛に対する考え方や、恋愛を自分の中にどのように位置づけているか、そして恋愛に対する姿勢が男女で異なっていることに原因があると考えられる。男性において、仮説はほぼすべて棄却されたものの、平均値において、恋愛経験がない者よりもある者の方が高く、長期交際経験がない者よりも長期交際経験がある者のほうが高いという傾向がみられたことから、男性においても、アイデンティティの確立に恋愛が多少影響を及ぼしている可能性は考えられる。なかでも、自律性は恋愛によって影響を受けていると考えられる。すなわち、男性の場合、交際相手から認められていると感じることによって自分に自信を持ち、自ら選択し決断できるのだという有能感を持つものと考えられる。しかし、交際回数が多い者は、相手との深い関係を求めず、希薄な短い付き合いに終始していると考えられ、自律性を始め、概して低い平均値を示している。交際回数が多い男性は、恋愛によってアイデンティティが確立されるとはいえない。あるいは、アイデンティティが確立されていない男性は、よりたくさんの人と交際関係を結び、なおかつ単発的な付き合いが多いと考えられる。

女性においては、恋愛経験の質によってアイデンティティの程度に有意な差がみられていることから、恋愛はアイデンティティに何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。まず、現在恋人がいる者の方がいない者よりもアイデンティティの程度が高かったことから、恋人の存在はアイデンティティの程度を高める要因の1つであると考えられる。恋人とは、自分を認めてくれている存在であり、家族以外の者から賞賛を得ているのだという感覚から、自信、有能感が得られ、何事にも意欲的に取り組むことができ、卑下することなく周りと接することができるのだと思われる。交際回数においては、交際回数が多いほどアイデンティティの程度も高く、女性の場合は、たくさんの人と付き合っている人ほどアイデンティティの程度が高いことが示された。この結果は男性とは異なるものである。複数の尺度の平均値において、②1回<①0回<③2回~3回<④4回以上という結果が出ており、1回の付き合いでアイデンティティが獲得されることは難しく、何回も交際経験を重ねることでアイデンティティも獲得されていることがうかがえる。このことから、女性の場合は、1回目よりも2回目、3回目というように、交際経験を通して自分自身に何らかの成長があり、それによってアイデンティティが獲得されていると考えられる。そして、長期交際を経験しているものは、経験していないものよりアイデンティティの程度が高いという結果も出ていることから、回数が多く、なおかつ一人の相手と長期に交際をしているほうが、アイデンティティを確立することにおいてより効果的であることが理解できる。つまり、女性においては、すべての仮説が概ね支持されたといえる。

以上の研究1より、男性よりも女性のほうが、恋愛がアイデンティティの確立に与える影響が大きいという示唆が得られた。そして、女性においては、交際経験が豊富な人ほど大きな影響を受けていることが示された。そこで、恋愛のどのような要因がアイデンティティの確立に影響を及ぼしているのかを探るため、研究2として、長期恋愛を継続中である女性に対して、インタビューというかたちで、恋愛の質的側面に焦点をあてた探索的な検討を試みた。

## 研究2 ～面接調査～

### 1. 目的

恋愛関係におけるどのような要因が、アイデンティティの確立、および同一性の感覚に影響を与えているのか、その質的側面を探ることを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 被面接者

質問紙に協力してくれた女性で、現在異性との交際が2年以上継続中である者(女性6名)。なお、以下A～Fと表記した。

#### (2) 面接時期

2006年12月26日～2007年1月12日

#### (3) 面接内容

本研究の目的に沿った質問を含み、他にも恋愛関係に関するいくつかの質問をした。具体的には、恋愛によって自分自身に変化はあったか、恋愛によって人とのかかわり方に変化はあったか、恋愛によって自分自身が成長したと思うことがあるかなど、被面接者がエピソードを話しやすいように質問した。また、探索的に検討できるように、なるべく多くのエピソードを引き出すように質問した。

#### (4) 面接方法

一人あたりの所要時間は、およそ1時間から2時間であった。面接場所は、空き教室、喫茶店など、被面接者が話しやすいと思われる場所を選んだ。面接内容は、被面接者の承諾のもとで全て録音した。面接内容によって被面接者が特定されることはないこと、答えたくないことは無理に答えなくていいこと、途中、気分が悪くなったり、これ以上無理だと感じたら、遠慮なく言ってもらよう教示した。

#### (5) 分析方法

##### ① 被面接者の情報

交際期間を記載した。なお、被面接者が特定されることを防ぐため、年齢や交際相手の属性は記載しなかった。

##### ② 逐語録

面接の録音を逐語録に起こし、回答の内容が損なわれないように留意し要約を作成した。なお、波線部分は、アイデンティティの獲得に影響を及ぼしていると思われる箇所を示している。面接者の質問は、「○」で示し、被面接者の回答は「」で示した。

##### ③ 被面接者ごとの考察

逐語録でアイデンティティに影響を及ぼしていると思われる要因と、アイデンティティ尺度、およびEPSIの各下位尺度とを照らし合わせて考察した。

### 3. 結果と考察

被面接者A～Fのアイデンティティ尺度、およびEPSIの下位尺度得点はTable 7に示した。平均値(女性全体; N=人数)とは、研究1における女性全体の平均値であり、平均値(個人)とは、EPSIの総得点を8で割った個人の平均値を示している。

Table 7 アイデンティティ尺度・EPSIの下位尺度得点

	基礎	確立	信頼性	自律性	自主性	勤働性	同一性	親密性	生殖性	統合性	平均値 (個人)
A	33.0	34.0	19.0	21.0	22.0	20.0	27.0	25.0	19.0	22.0	21.9
B	24.0	29.0	14.0	15.0	14.0	21.0	16.0	20.0	15.0	20.0	16.9
C	14.0	18.0	18.0	16.0	18.0	9.0	17.0	23.0	16.0	19.0	17.0
D	37.0	30.0	25.0	18.0	24.0	16.0	28.0	21.0	24.0	25.0	22.6
E	37.0	30.0	20.0	16.0	21.0	21.0	23.0	21.0	20.0	22.0	20.5
F	35.0	37.0	17.0	24.0	21.0	21.0	23.0	22.0	24.0	20.0	21.3
平均値(全体)	24.5	28.3	16.5	15.7	13.9	16.4	17.7	18.2	14.4	17.3	
N	39	39	38	39	39	39	39	39	39	38	

以下、分析方法にそって、被面接者ごとに検討を行う。

### (1) 被面接者A

- ① 交際期間 2年3ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Aの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 8)。

Table 8 被面接者Aの逐語録一部抜粋

<p>○恋人はどんな存在ですか。</p> <p>「かけがいのない存在。サークルとかで本当に気がめいったときにも、絶対に私の味方でいてくれた。今考えたら、私がおかしかったと思う面もあるんだけど、<u>その時、その場では味方でいてくれたのは心強かった。</u>」</p> <p>○恋人との交際を通して、自分自身の中に変化はありましたか。</p> <p>「<u>情緒不安定なことが少なくなった。いざというときに、頼っていい人がいる。あまり人に頼るタイプの人ではないんだけど(自分が)、自分の彼氏が、頼っていい存在なんだと思えたとき、すごく気が楽になった。彼はそういう存在。</u>」</p> <p>「今まで、別れの危機は特になかったと思う。考えの違いでけんかはある。別れの危機には達しないけど。けんかは、その日のうちに解決するようにする。これだけは許せないということはあったけど、相手が改善してくれた。妥協してくれたから、大丈夫だったかな。時には、いろいろきまぐって(心配なことを)・・・私は、<u>不安なことは、すべてしゃべってみる。そして、最後は信じてみる。そういってるんだから、相手のことを信じてみようと思う。</u>」</p> <p>○嫌いになられたのではないかと思うことはありませんか。</p> <p>「ある。けんかしたときだね。<u>自分が、本当に自分のそのままの意見をぶつけてるから、そこを見られてしまった、分かれたときに、ああもう嫌いになられたかなと思った。</u>」</p> <p>○交際相手は、あなたの中でどの程度ウエイトを占めていますか。</p> <p>「<u>飲み込まれきってはいけないと思っている。すごい好きだけど、ちゃんと自分を持っていたい。相手のとおりにとかではなくて、自分もちゃんと違ったら(言いたいこと、思ったことを)言えるとか。それじゃないとだめだと思う。どっちかが飲まれてたりしたらだめ。大学にはいってからやっと。今までは、自分がすごく好きってだけでつっぱして、気がついたら相手の心がはなれていたりした。客観的にみられることももってないといけないと思う。</u>」</p> <p>「<u>日々何かをしていたいと思っていたら、マンネリなんてないと思う。私自身も、すごく気をつけてる。心がけていることは、相手のことを大事にする。いくら馴れ合いとはいえ、相手に対する思いやりがなくなったら終わり。</u>」</p> <p>「<u>高校のときまでは、外見ばかりをよくしようとがんばっていたけど、今では、内面をもっとみがきたいと思っている。相手にも、中身をほめられるとすごくうれしい。これは、過去の経験があって、今に活着ているんじゃないかなと思う。教訓だよな。すごく学んだ。</u>」</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## ③ 考察

信頼性においては、「絶対に私の味方でいてくれた。」「味方でいてくれたのは心強かった。」とあるように、交際相手が自分を認めてくれる存在、常に味方になってくれる存在であることから、「最後には相手のことを信じてみようと思う。」と、相手に対する信頼感を述べている。このことから、周りの人に対する見方も肯定的になっていると考えられる。同一性においては、恋人は「頼っていい存在」とあり、頼ることで「情緒不安定なことが少なく」なり、「気が楽になった」ことから、Aは、自分に混乱することなく、明確に自らの内面に目が向けられるようになっている。さらに、「中身を相手に褒められると嬉しい。」という経験を通じて、「内面をもっと磨きたい。」と思うようになり、自分自身の内面をさらによくしていきたいと思うようになっている。これは、同一性の高い得点に影響を与えていると考えられる。同一性尺度には、「自己の混乱さ」「自分を理解しているかどうか」を測る項目があり、恋人に頼ることで自己の混乱から逃れることができ、内面に目を向けられているものと思われる。一見すると、これは恋人への依存とも考えられるが、Aの場合、自律性の得点も高いことから、単なる依存ではなく、“頼れる”という安心感から自らを安定してみつめることができていると考えられる。親密性においては、「すごい好きだけれど、相手に飲み込まれてはいけない。」「相手の通りにはではなく、きちんと自分を持っていたい。」というように、自分を見失うことなく恋人と親密な関係を築こうとしている。頼れる相手であるが、それに飲み込まれてはいけない、自分をしっかり持っていたいと考えている。自主性においては、恋人とマンネリ化をしないために、「日々何かをしたい。」といった意欲的な物事への取り組みがみられ、恋人の存在が、Aの自主性を高めていると考えられる。

## (2) 被面接者B

- ① 交際期間 2年3ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Bの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 9)。

Table 9 被面接者Bの逐語録一部抜粋

<p>○大学生活を通じて、自分自身が変わったと思うことはありますか。  「高校のときは、自分の殻にこもってたかんじだけど、大学に入ってから、開放的になった気がする。高校のときは、ちょっと仲間がぎくしゃくしてたから…。大学の仲間はすごくいいと思う。安心できる気がするかなあ。あとは、後輩のこと、人のことを考えられるようになった。」  「依存しすぎないようになった。○○にもそうだし、他の人にも。徐々にそうなったかな。○○には常に注意はされている。それで、こんなんじゃだめだなと思った。おこられたり、あきられたりする。なんか、俺は何にもしないから自分でしろというかんじ。」</p> <p>○交際相手はどんな存在ですか？  「保護的な存在。いなかったらたぶん生活がひどいと思う。」</p> <p>○今まで、別れの危機はありましたか。  「中身を注意されすぎて、外見だけしか好きじゃないんじゃないかと思って、聞いたことはある。そんなことないよ。なんとなく全部いいんだけ言われた。不安にはならないかな。それで、相手にほかの女の人がいったりしたら不安になると思うけど、そういう心配がないから大丈夫。」</p> <p>○交際相手による影響だと思うことはありますか。  「いい影響は、人の気持ちをさらに考えるようになった。自分がされたらどう思うかということを考えるようになった。○○に言われて、すごく考えて反省した。男と女を平等にあつかうようになった。男をいい加減に扱うのは、ひどいことなんだと思った。約束とか、男なら時間に遅れてもいいやみたいなことはしなくなった。」  「特に相手に依存しているわけではないけど、いざというときには助けてくれる存在。だけど、つねに一緒にいたいわけではない。自分の時間はちゃんと持っていたいと思う。」</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## ③ 考察

交際相手に指摘されることで「こんなじゃだめだ。」と思い、周りの人に「依存しすぎないようになった。」「人の気持ちを考えるようになった。」と述べている。これは、自律性に影響すると思われるが、Bはそれほど自律性が高くない。「依存しすぎないようになった。」と言ってはいるものの、交際相手を「保護者的な存在。」と考えており、多少依存傾向があるように思われる。ここでのBのコメントに関しては、元々依存傾向が強かったものが、交際相手の指摘により弱められたと解釈できる。Bの場合、勤勉性が高く、交際相手による指摘は、「これではだめだ。」と感じ、目標に向かってがんばろうという方向に影響を与えていると考えられる。また、「依存しているわけではないが、いざというときに助けてくれる。」「自分の時間はきちんと持っていたい。」とあり、自分を見失うことなく親密な関係を築けていることがわかる。このことは、親密性の高さに関係していると思われる。また、「中身を注意されすぎて。」「好きだと言ってほしいと言う。」とあるように、Bは自分自身に対して不安を感じている。相手からの賞賛が得られていないわけではないが、言ってもらわないと不安であり、またこのままの自分でいいのかといった迷いも感じとれる。このことは、Bの同一性の低さにも表れている。しかし、交際相手から中身を指摘されることによって、自らについて考えるきっかけを与えられていると考えることができ、Bにとって、今は自分自身を見つめる時期であると考えられる。このまま交際が続くようであれば、自分自身を見つめる時期を乗り越え、自分とはこういう人間だという感覚が得られていくと考えられる。Bは、交際相手から直接指摘されることで、人の気持ちを考えるようになったり、自分だったらどう感じるか考えるようになっていたりしており、Bに影響を与えているのは、交際相手からの直接的な指摘であるところが大きいといえる。

## (3) 被面接者C

- ① 交際期間 3年6ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Cの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 10)。

Table 10 被面接者Cの逐語録一部抜粋

<p>○交際することで、自分自身に変化はありましたか。</p> <p>「小さなことでいちいち怒らなくなった。どんなに親しくても、自分とは違うんだということを学んだから。元彼は、私が好きじゃなくなっても、付き合っていたときと同じような接し方をしてくれる。わざと怒らせるようなことを言ったり、私に対して全く気遣いというものがないし・・・もし、○○と別れてもそんなふうにはなりたくないと思う。今までは、けんかをするとわざと相手を傷つけたりすることを言っていたけれど、相手を傷つけて得られるものは何もないことがわかった。」</p> <p>○交際相手はどんな存在ですか。</p> <p>「○○は争いごとがあんまり好きじゃない。自分の意見、思ったことをばんばん言える人じゃない。だから、私が言ってもだまっちゃうから、けんかをしたとしても私が一方的になっちゃうんじゃないくて、『私はこう思うけど、○○はどう思う?』みたいに、いえるようになった。前までの私は自分の意見をどんどん言ってしまうたと思う。相手のことが考えられるようになったと思うし、自分に余裕ができてきたのかも。」</p> <p>「嫌なことあったとき、○○のところにいくと気が済む。落ち着く。癒し系。がーって私が言いたいことを一方的に言っても、ただ聞いてくれるだけなだけで、それでも安心できる。何を言っても、最終的に認めてくれるからかも。ただ、がんばれがんばれっていつてくれるだけで、私はがんばろうと思う。」</p> <p>「人に言われるからこうじゃなくて、もう自分自身は決まってる。昔はよく人に相談してたけど今はあんまりしないかなあ。したとしても聞いてもらうだけ(笑) ○○は、そういった私のことをよく理解してくれている人だと思う。」</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## ③ 考察

Cは、勤勉性、同一性の値があまり高くないものの、そのほかの得点においては高い値を示している。交際相手を、「何を言っても最終的には認めてくれる。」「私のことをよく理解してくれている。」存在だとしており、この存在が、周りのものに対する信頼感、自分に対する自信といった信頼性を高めていると考えられる。また、Cは「人に言われるからではなく。」というように、自分自身をしっかりとっており、「相手のことを考えられるようになった。」「傷つけて得られるものは何もない。」というように、依存しすぎることなく他者との親密な関係が築けている。これは、親密性の得点に影響を及ぼしていると考えられる。Cの場合、現在の交際相手からの影響というよりは、過去の交際経験による影響が大きいとみることができる。研究1では、女性の場合、交際回数が多いほど、アイデンティティの確立が高いという結果がでており、Cは特に、過去の交際経験から学び、それが現在の自分自身に影響を及ぼしていると考えられることができる。

## (4) 被面接者D

- ① 交際期間 2年3ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Dの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 11)。

Table 11 被面接者Dの逐語録一部抜粋

<p>○恋愛をすることによって、自分の中で変化はありましたか。</p> <p>「割り切れるようになった。昔は、すごく熱い。私が思うように相手に訴えかけてしまう。性格とかで、私が好きじゃないと思ってしまうところがあると、なんでそうなの？みたいに、はっきりとは言わないけど、こうしていこうよみたいに思っていたり行動していたりした気がするけど、<u>最近、そういう性格なんだっていうふうに思えるようになってきて、それが別に嫌だと思わないし、そういう性格なんだなって納得いくようになった。○○に対しては、自分の気持ちを出してしまう。○○の性格で、嫌なところがあると、そういう性格なんだなって思えない。(中略) だけど、いくら言っても彼でも変わらないことはあるから、それはそのうち自分の中で受け入れていることもある。</u>」</p> <p>「<u>時に怒られるときもある。もうやだ～何もやりたくない～って言うと、何言ってんだよ、俺だって怒るときは怒るよってかんで、ちゃんとそうゆうことやらないやつは嫌いだって、怒られたりもする。(略) 時には言われたほうがいいと思う。私にとっては影響力がでかいのかなあ。</u>」</p> <p>○彼はあなたにとってどんな存在ですか。</p> <p>「優しい。癒し。大事に思ってくれてるって言うのが伝わってくるから。」</p> <p>「俺のこと嫌いになっちゃうんじゃないとか、他の男のところにいっちゃうんじゃないかっていう心配はしていないと思う。<u>私が信頼しているのと同じように、彼も自分のことを信頼しているのかもしれない。</u>」</p> <p>○付き合うことで、成長したなと感じることはありますか。</p> <p>「割り切れるようになったというか、<u>人を受け入れられるようになったのは、彼と付き合ったことでの影響もあると思う。彼に対しては言うけど、まあそういうこともあるんだなと認められることで、他の人に対しても認められるようになったというか。</u>」</p> <p>「私は、○○の優しいところが好きなんだけど、きっと○○は私以外の人にも優しいから、そういうところいいな～って、私もそういう人になりたいなって思う。○○がアドバイスしてくれたことに対して、私もそうしようかなと思える。」</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## ③ 考察

「大事に思ってくれている。」と感ずることで、相手に対する信頼感をもてている。また、「なんでも言ってしまうのは、彼を信頼しているから。」「彼も同じように、私を理解してくれている。」という感覚がもてており、これも信頼性の高い値に影響を与えていると考えられる。また、「人を受け入れられるようになったのは、彼と付き合ったことでの影響もあると思う。」と述べており、いくら彼でもそういうこともあるのだと思うことで、被面接者自身、他の人のことも認められるようになったとしている。なんでも言える交際相手でさえ自分が思い通りにならないことがあるのだと感ずることで、他の人のことも認められるようになっており、これは、他者を受け入れるという親密性が備わっているといえる。恋人を受け入れることによって、ほかの人をも受け入れることができるようになってきていることから、恋人の影響が親密性の程度を上げていると考えられる。また、恋人の優しいところをよいと思い、私もそうなりたいと感ずており、Dは、恋人をモデルにし、自分もそうなりたいという肯定的な感情をもてている。この肯定的な感情は、アイデンティティを得るための基礎が十分に備わっているためであり、Dのアイデンティティの基礎が非常に高いことから、恋人の存在が大きく影響していると考えられる。さらに、恋人からの指摘によって反省する、また、言ってくれたことに対してやってみようとする行動がみられ、交際相手からの直接的な指摘がDに影響を与えているといえる。

## (5) 被面接者E

- ① 交際期間 3年8ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Eの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 12)。

Table 12 被面接者Eの逐語録一部抜粋

○自分自身に変わったことはありますか。  
 「いろんな意味で余裕が出てきた。付き合い始めたときは、自分が不安定になって、生活にすごい影響があったけど、今は余裕ができたことで、自分をコントロールできるようになった。安心感があるのかもしれない。あとは、自分に焦りがなくなってきたのかも。私はみんなに劣ってるとか、何かしなくちゃいけないと思わなくなった。」  
 「相手がいることで抛り所ができた。絶対一人は味方がいるみたいな。だから、余裕持って何もかもできるのかもしれない。」

○彼はあなたにとってどんな存在ですか。  
 「3年たって、やっと相手のことが好きだと自信もっていえる気がする。何かをやってもらいより、相手にやってあげることで自分が満たされたりする。」  
 「計算してるとかない。不満はすべて口に出して言ってくれるから、安心していられる。」

## ③ 考察

Eは同一性が非常に高く、「抛り所があつて、認めてくれる存在がいることで、余裕を持っていろいろとできる。」と述べており、余裕ができたことで、自己の存在を明確に理解することができている。また、恋人から認められていると感ず、恋人が抛り所になっていることから、自発的に物事に取り組めるようになってきている。これは自主性に大きく影響を及ぼしていると考えられる。また、Eの親密性は高く、孤独感を感じずにいられる要因は、抛り所である恋人の存在が大きいと考えられる。そして、「何かをやってもらいより、相手にやって

あげることで自分が満たされたりする。」とあり、交際相手と親密な付き合いができていこともうかがえる。アイデンティティのための恋愛の中の、相手にのみ込まれる不安を感じたり、相手の挙動から目が離せないといった不安定さはみられない。そして、相手からの賞賛を得たいというアイデンティティのための恋愛ではなく、相手に与えてあげたいという献身的な態度がみられ、生産的な親密性であると考えられる。

#### (6) 被面接者F

- ① 交際期間 2年6ヶ月
- ② 逐語録

以下は、Fの逐語録の一部を抜粋したものである (Table 13)。

Table 13 被面接者Fの逐語録一部抜粋

○恋人はどういう存在ですか。  
 「安心して心が許せる存在なのかなあ。一緒にいて疲れななし、自分もとても自然体でいられるから、だから安心していられるのかもしれない。あとは、言いたいことがはっきり言える相手。言うことで、嫌われちゃうんじゃないかとか思わないし、ただ喧嘩はするけど、それでも最終的にはどちらかが折れて仲直りできるから・・・○○のことを信じてるから そうなのかもしれないけど。」

○自分自身変わったことはなんですか。  
 「社交的になった。いろいろな人と関わりたいなあとか、知らない人とも気軽に話せるようになったというのかなあ。○○が、ものすごく社交的で、どんな人とも壁を作ることなく接してるし、私もそうでありたいと思ったのかも。それか、一緒にいるうちに自然と私もそういう心がけになったのかも。どっちだかよくわからないけど、社交的というか、内にこもらなくなったのは○○の影響かもしれない。あとは、後輩の世話というか、後輩とよく接するようになった。」

「外で辛いことがあったとき、バイトとかでどうしようもなく落ち込んだときでも、○○がいるって思うだけですごく気持ちが落ち着いたことがある。きつといなかったら、落ち込む度合いがもっと大きかったと思うけど、○○がいてくれるんだってだけで心が楽になった。別に悩みを相談したとか、癒してくれたとかじゃ全然ないんだけど、ただいるっていうその存在だけで、私にはかなりの影響を及ぼしていると思う。」

「自分に自信が持てるようになった。自分を認めてくれる相手がいるから、何でも思い切ってやれる。錯覚かもしれないけど、認めてくれる人がいるから、いろいろと大胆になれるよね。高校までの私だったら、何でも周りの目とか評価がすごく気になってたけど、今はあまり気にならない。自分らしくやればいいんだと思えるようになった。まあ、人の評価が百パーセント気にならないといったらうそになると思うけど。」

#### ③ 考察

「安心して心が許せる存在。」「言いたいことがはっきりといえる・・・信じてるからそうなのかもしれない。」とあり、恋人が安心して心許せる存在であることから、相手に対する信頼感を得ていることがうかがえる。これは信頼性に影響を及ぼしていると考えられる。また、相手の影響によって「社交的になった。」「後輩の世話をするようになった。」とあり、相手をモデルにすることで社交的になろうと意識し、実際、社交的になったとしている。他者と親密な付き合いがもてるのは、恋人の影響が大きいと考えられ、これは親密性に影響を及ぼしていると考えられる。同様に、生殖性においても、相手をモデルにすることで後輩の世話をしようとして意識し、実際世話をやくようになったとしている。そして、「自分に自信が持てるようになった。」「自分を認めてくれる相手がいるから何でも思い切ってやれる。」とあり、恋人から認められていることから自信が付き、何でも積極的に取り組めるといった自主性がみられる。また、自分に自信がついたことによって、「自分らしくやればいいんだと思えるように

なった。」とあることから、自分という感覚をしっかり持っていることがうかがえる。これは同一性に影響を与えており、恋人から認められていることからの影響であると考えられる。以上のことから、Fは、恋人の考え方や価値観を知ること、それに共感し、自ら取り込む形でアイデンティティを獲得していると考えられることができる。つまり、恋人がアイデンティティのモデルとして機能しているといえる。

## 総合的考察

まず、恋愛はアイデンティティの確立に影響を及ぼしているかどうかについて検討する。研究1から、男女によって相違する結果が示された。男性の場合、恋愛はアイデンティティの確立にほとんど影響を及ぼしていなかった。

その一方、女性の場合は、恋愛がアイデンティティの確立に影響を及ぼしているという結果が示されている。女性は、長期の交際経験があり、交際人数が多いほどアイデンティティの確立が高かった。つまり、一般的に「恋愛経験が豊富な」女性ほどアイデンティティの確立が高いといえる。Cは、「過去の恋愛から、相手を傷つけて得られるものは何もないことがわかった。」とあり、前回の恋愛から学んだことによる成長を挙げている。女性の場合、前回の恋愛から学んだことを新しい恋愛に活かす傾向があり、それが、交際回数が多いほどアイデンティティの確立も高いという結果につながっているといえる。唯川恵の小説に、こんなことが書かれている。「男にとって、恋はいつも単発ドラマです。その時その時、それなりの結果を迎える。でも女は違う。女にとって、恋は連続ドラマです。」(唯川, 2001)。これは、女性は過去の恋愛を次の恋愛に活かすことができることを示している。このことから分かるように、女性は過去の恋愛を次の恋愛に活かすことができるが、男性は過去の恋愛は過去のものとして割り切って考えているため、いくら交際回数を重ねても、アイデンティティの確立に影響を及ぼさないと考えられる。

以上、研究1によって女性と男性の恋愛とアイデンティティの関係の相違が示唆されたといえる。しかし、「恋愛の問題は、公式もなければ法則もない。最後は、『いま、ここで、この私にとって』という、一回限りの独自のものである。」(西平, 1981)とあるように、「こういうものだ。」という位置づけは難しい。したがって、今回の結果は、こういう傾向もあるかもしれないという1つの可能性が提示できたという程度にとどめるのが望ましいと考える。

次に、研究2から、恋愛のどのような要因がアイデンティティに影響を及ぼしているのかについて検討する。大きく3つの要因がみられた。1つ目は、「恋人をモデルとすることによる影響」である。Dは、恋人が誰に対しても優しいという性格についていいと思い、自分もそうしたいと思っている。また、Fも、社会的で後輩の世話をよくする恋人に影響されて、自分もそうするようになったとしている。このように、恋人のよいところに共感し、それを自己の中に取り込むという形で自己の価値観を変化させている。つまり、アイデンティティを確立していく上で、恋人が自己のモデルとして機能しているといえる。

2つ目は、「恋人からの直接的な言葉による影響」である。Aは、恋人から直接内面を褒められることによって、もっと内面を磨きたいと思っている。Bは、恋人から率直な指摘を受けることによって自分の不適切な行動を自覚し、がんばらなくてはいけないという気持ちになっている。同様に、Dは、恋人から受けたアドバイスによって自己を見直している。このように、恋人からの率直な指

摘、アドバイス、賞賛によって自己の内面をみつめ、アイデンティティを獲得していることが理解できる。

3つ目は、「恋人が無条件に認めてくれる、味方でいてくれることによる影響」である。この影響は、すべての被面接者においてみられ、影響されている要因は、大きく2つ挙げることができる。1つは、信頼感、安心感が得られることである。A、C、E、Fは、恋人がどんなときでも味方でいてくれることで、それを拠り所にした安心感、信頼感を得ることができている。さらにEは、安心感を持つことで自分に余裕ができたといっている。恋人が信頼できる相手であることで、自らの内面を不安定になることなくみつめられている。またFは、「味方になってくれる恋人がいる。」という存在による安定感を述べている。何をされるということではなく、恋人の存在自体に意味を見出している。これは、信頼性に大きく影響を与えている面であり、内面を見つめることができるという点に関しては同一性に影響を及ぼしていると考えられる。2つ目は、恋人が無条件に認めてくれることによる自信である。Fは、自信を持つことによって物事を意欲的に取り組めるようになってきている。Eも、常に味方になってくれる恋人がいることで積極的な姿勢が出ていることから、自信をもっていると考えられる。Fの場合、自信がついたことにより自分らしくやればいいのかと思うようになり、確固とした自分という感覚がもてていることがわかる。

ここでみられた3つの影響は、多川(2003)の恋愛関係が対人関係観へ及ぼす影響に類似している。まず、本研究の「恋人をモデルとすることによる影響」は、多川(2003)においても傾向として挙げられている。恋人の他者との接し方を観察し、恋人と話をする中で、恋人の考え方や価値観を知り、人との接し方を自己の中に取り込んでいるとしている。多川(2003)の場合、最初は表面的な模倣であり、価値観にまで影響を及ぼしているかどうかについては疑問が生じるとしている。そして、模倣から次第に内面化されていくものであるが、その人がどの段階にいるのかを判断することは難しいとしている。今回は、アイデンティティの確立が数値として示されているため、どのくらい内面化されているかどうかは、ある程度捉えることができたと考えられる。

2つ目の「恋人からの直接的な言葉による影響」に関しては、多川(2003)は「直接的な働きかけ」として挙げている。単なるアドバイスにとどまらず、2人の率直なやり取りも変化のきっかけになるとしている。“もしも恋人に対して嫌なことを言った場合に、それが嫌だということが率直に返ってくる”という例が挙げられており、どのような行動をすれば人は不快を感じるのか、どのような場面でどういう行動をとるのが適切なのか、ということを恋人とのやり取りから学んでいるとしている。同様の例が、Bにもみられている。「男と女を平等に扱うようになった。男をいい加減に扱うのは、ひどいことなのだと思った。約束とか、男なら時間に遅れてもいいやみたいなことはしなくなった。」とあり、これは恋人とのやり取りを通して学んだことである。Bの場合は、このことを直接恋人に指摘されたことによって学んだと言っていることから、今回は「直接的な言葉」としたが、広い意味で「直接的な働きかけ」といえるであろう。また、社会的スキルの学習機能にも相当すると考えられる。相川(2000)によれば、社会的スキル・トレーニングには一般に教示、モデリング、リハーサル、フィードバック、般化の5つの基本的技術があるとしている。恋人からの直接的な働きかけは、これらの技法のうち、フィードバックに対応するものである。フィードバックとは、学習者の行動が適切である場合には褒め、不適切である場合には修正を加えることであり、そうすることによって学習者がさらにスキルを実行しようとすると考えられている。相手が恋人であると、その影響力はさらに大きいものであると考えられる。

3つ目の「恋人が無条件に認めてくれる、味方でいてくれることによる影響」は、多川（2003）による、「恋人に対する信頼感や安心感に基づく影響」から生じる対人関係観の変化と類似している。恋人との関係が逃げ場所になったり、何があっても自分には励ましてくれる相手がいる、味方がいるという恋人に対する信頼感から、周囲の人に余裕をもって接することができたり、自分の意見が言えるようになるとしている。これは、本研究で信頼性尺度に影響を及ぼしている信頼感、安心感の部分と一致する。

以上のように、本研究で挙げられた3つの影響は、対人関係を向上させるための影響と類似していると考えられる。対人関係を向上させると同時に、自己のアイデンティティも獲得しているということが考えられる。アイデンティティの確立は、対人関係の向上を包含するものととらえることができ、多川（2003）は本研究の結果を支持するものであるといえる。

### 今後の課題

今回は、恋愛のよい影響に焦点を当てて研究を行ったが、恋愛は、束縛したり重荷に感じてしまうといった否定的な面も持ち合わせている。今後、恋愛の肯定的な側面と否定的な側面の両面からの影響をみることによって、より恋愛とアイデンティティの関係が明確になると思われる。また、研究2では2年以上の交際経験がある女性に限定して面接を行ったが、「アイデンティティが確立している者」を取り上げて面接をすることで、さらにアイデンティティに影響を及ぼしている恋愛を探ることができると考えられる。今回は、研究1の質問紙調査において面接の協力者を募ったが、思うような数の被面接者が集まらなかった。より多くの資料を得るためには、被面接者を集める工夫も必要になってくると考えられる。また、研究1の調査数が十分でなかったことから、結果に偏りが生じている可能性があり、十分な信頼性があるとはいえない。今後、大学生だけでなく青年期に位置する若者全体にまで研究の範囲を広げることで、より青年期の恋愛とアイデンティティの確立との関係を明解にとらえることができるであろう。

### 引用文献

- 相川 充 2000 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学20 サイエンス社
- Dietch, J. 1978 Love, sex, roles and psychological health. *Journal of Personality Assessment*, 42, 626-634.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle. Psychological Issues Monograph*, Vol.1, No.1. New York : International Universities Press. (小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Frankl, V. E. 1952 *Aerztliche Seelsorge*. Wien : Frans Deuticke. (霜山徳爾(訳) 1957 死と愛 みすず書房)
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 中西信男・佐方哲彦 2002 EPISI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店

- 西平直喜 1981 青年の世界3 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 大野久 1993 アイデンティティのための恋愛に関する質的データからの接近 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 208.
- 大野久 1995 青年期における生き方や価値観の選択 落合良行・楠見孝(編) 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直しー青年期 金子書房 pp. 89-123.
- Ruvolo, A. P. & Brennan, C. J. 1997 What's love got to do with it? Close relationships and perceived growth. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 814-823.
- 下山晴彦 1992 アイデンティティ尺度 心理測定尺度集Iー人間の内面を探る<自己・個人内過程>ー 堀洋道(監修) サイエンス社 pp. 419-431.
- 多川則子 2002 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 2, 65-73.
- 多川則子 2003 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究ー対人関係観に注目してー 対人社会心理学研究, 50, 251-267.
- 唯川恵 2001 シングル・ブルー 集英社